

「ファナー」の観点からスーフィズムを見直す

東長 靖

※本稿は2015年12月8日、東洋哲学研究所の研究員・委嘱研究員を対象に行われた「イスラーム・レクチャー」をまとめたものです。

1 はじめに

今回は「スーフィズムの諸相」について、「ファナー（消滅）」という自我の消滅などの神秘体験をさす概念を手がかりに、お話ししたいと思います。

全体の目的ですが、まず「スーフィズムにおけるファ

ナー説の変遷を検証する」ということです。一般にイスラーム神秘主義と呼ばれるスーフィズムの中で「ファナー」すなわち「消滅」ということについて、どんな説が出されてきたのかを跡づけます。それから、それを元にして「スーフィズムとは何なのか」ということを申し上げたいと思います。

スーフィズムというと、旋回舞踊——日本ではクルクルダンスなどと呼ばれることもあります。正確にはセマー (sema) という儀礼です——ばかりがクローズアップされますが、あれはトルコを中心にしたメヴレ

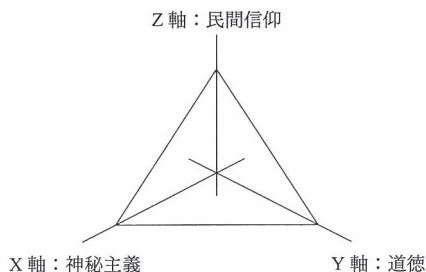


図1 スーフィズムの3極構造(東長靖『イスラームとスーフィズム』名古屋大学出版会、34頁から転載)

ヴィー教団に独特の修行で、他の教団ではやりません。では、スーフィズムの定義は何かとなると、これは大変に難しいのですが、私は「スーフィズムを3つの要素で考えよう」と主張しています。つまり、神秘体験に根差した「神秘主義」、日常的倫理を説く「道徳」、聖者信仰などの「民間信仰」。この3極構造(図1)を考えると、スーフィズムが理解しやすいのではないかと思います。

そのうち、きょうは民間信仰にあまり深く入るつもりはなく、「神秘主義」と「道徳」、その間の関係に焦点を絞ってお話をさせていただきます。と思います。構成としては、まず「古典期にお

けるファナー説の確立」について、お話しします。古典期というのは、イスラームの生まれた7世紀から12世紀ぐらいまでです。これに続く「中世」は、イスラーム思想史としては大体17世紀ぐらいまでです。この中世において、一方では神秘主義が非常に哲学化してきます。このことが、ふたつ目のトピックです。他方、このように哲学化していく宗教のあり方を激しく非難した人たちがいました。その流れが、いまのいわゆる「イスラーム原理主義」につながってくるわけですが、こういう立場からの非難について最後にお話ししたいと思います。

2 古典期におけるファナー説の確立 クシャイリーを事例に

2・1 ファナーとは何か？

まず、「ファナー(fana)」という言葉です。スーフィズムには重要な概念が幾つもありますが、おそらくその中でもトップテンに入るくらい、よく使われる概念です。もともとの意味は、何かが「消える」というた

だそれだけです。

スーフィズムの概念として使う場合には、基本的な最初の「消滅」は「エゴの消滅」です。「消融」という訳語を当てる場合もあります。これはエゴが消滅した結果、神と融合する、神に融け込んでいくといった意味です。

「ファナー」という言葉は、常に「バカー (baqa)」と言う言葉と対にして用いられます。バカーのほうは何かが「残っている」と言うときに普通に使う動詞からきています。「持続」「残存」などと訳せる言葉です。つまり、自分の中からエゴという人間的な要素がどんどん消えていって、真空になったところに神が入って来るとい感じです。神的なものが入ってきて、それが私の中にどっかりと居坐っているという状態。それもずっと居続ける。日常生活に戻ってからも、なおかつ神とともにあるかのように生きる、こういう状態・境地を「バカー」と言います。この後、「持続」という言葉が出てくるがありますが、それは「ファナー」の対概念の「バカー」を指しています。

歴史的に言えば、9世紀ごろのハッラーズ (Abu Saïd al-Kharraz) と呼ばれる人がこの「ファナー・バカー説」を初めて唱えたとされていますが、異論もあります。ともあれ、9世紀ごろには、まだ「ファナー・バカー説」は一意的に確立してはおらず、論者ごとに、いろいろな説が出されています。

2・2 スーフィズムの正統化

それらをまとめ上げたのが、10世紀から12世紀にかけての思想家たちで、次の6人ぐらいが代表的な人たちです。

ホラーサーン (北東イラン) のサツラージュ (al-Sarraj)、ブハーラー (中央アジアの都市) のカラーバーズイー (Kalabadhi)、イラクのアブー・タリーブ・マッキー (al-Makki)、ホラーサーンのクシャイリー (al-Qushayri)、南アジアのガズナとラホールで活躍したフジュウイーリー (al-Hujwiri)、イラクからイランにかけて活躍したアブー・ハーミド・ガザリー (Abu Hamid al-Ghazali) の6人です。

彼らは、それまでにスーフィズムにおいて出てきた諸理論を整合性があるようにまとめ上げ、マニユアル化した人たちです。バラバラの、時として相反するような説がいろいろな人によって唱えられていたこともあって、当時、スーフィズムは法学者たちから、かなり疑いをもって見られていました。スーフィズムは、

時に神との合一みたいなことを言い出すわけです。イスラームの根本的な構造は「神が一方的な命令者であり、人間はその僕である。人間は神の命令に従うこと」によつてのみ救われるのだ」というものです。スーフィズムは、それを乱すかのように「人間が神に近づいていつて、時に神とひとつになることができる」と言うわけですから、非常に激しく批判されることがありました。

そこを何とか弁護して、それまでに成立していた法学とか神学などの学問とも「ちゃんと整合性がある理論なんですよ」と一生懸命に主張する人たちが、10世紀後半から12世紀の初頭までの2百年ぐらい活躍するわけです。

彼らはそれぞれ古典的な「スーフィズム理論書」を書きますが、どの本でも「ファナー・バカー説」が取り挙げられています。

2・3 クシャイリーのファナー説

その中のクシャイリー (al-Qushayrī) イスラーム暦465／西暦1072年没) という人を例に、お話ししたいと思います。

「消滅」の3段階

彼は、ファナーを3段階に分けて論じます。

まず①「神の属性の中の持続を通して、自分自身と自分の属性から消滅する」段階です。

私たちのエゴとか欲望みたいなものから逃れるのが、この最初の段階です。私がついている悪しき属性、悪いことをしようと考える気持ち・心から逃れなければいけない、それを消さなければいけない。それはどういふふうにしてできるかというところ、一神教ですから、当然、神の助けを借りなければできない。それでも、神の本質に簡単に到達できるわけではないので、もう

ひとつ下のレベル、つまり「神の属性」において神の恩寵に与かる。神の属性の中で自分が生き続けるということを通して、自分自身のエゴから消滅する。逆に言うと、自分自身のエゴから消滅して神に抱かれると言ってもいいかもしれません。それが最初の「日常的なエゴからの消滅」です。

ここで「ゝからの消滅」という言い方をしています。これは「ファナー・ミン」という、英語で言うところの *annihilation from* に当たる言葉を直訳したものです。「エゴという状態から自分が消滅する」という言い方をしていますが、日本語の感覚からすると「自分のエゴが消滅する」とお考えいただいていいのだろーうと思います。これが最初の段階です。

次に出てくるのが、②「神の属性の中の持続から消滅する」という段階です。「自分は、神の属性の中で持続している」という、思い上った心を消さなければいけない。神の属性の中で持続して、安閑として「ああ、私は救われたな」と思っているようではまだだめで、更に、そういう意識そのものを消滅するのです。

しかも、これでもまだ十分ではなくて、③「自分が消滅した」というビジョンから消滅する。自分が消滅した、つまり、エゴが本当になくなったのだと思っている気持ちはまやかして幻影である。だから、その気持ち・体験からすら消滅して、もうひとつ上に行かなければいけないと言います。

『倫理的／靈魂論的理論』

もう少し具体的に見てみましょう。一番目の初歩の段階、「自分自身と自分の属性からの消滅」というところは、彼の文章のほかの箇所ではどういふふうの説明されているかというと、ある部分ではファナーというのは「非難されるべき属性からの消滅」とあります。自分のもっている悪い属性、悪いことをする自分という性質がなくなることです。別の箇所では、「悪行、不道徳、悪しき靈的状态からの消滅」と書いています。インモラルな悪い行い、それから靈の状態が心理的に悪いほうに行っている、そういう自分の靈的、心理的な状態をなくさなければいけないということです。

ここでは、非難されるべき属性とか、悪い行いとか、

不道德とか、悪しき何とかと、すべて否定的な表現がついていますが、こういうものは「道徳的」「倫理的」に言っているわけです。それと同時に「霊的状态」というような言葉は、この理論が靈魂論の一部であることを示しています。英語ではサイコロジイという言葉で説明されていますから「心理学」と訳してもいいと思います。古い時代の神秘主義をやるときには、普通は何となく「靈魂論」と訳しています。スーフィズムの靈魂論を論じる際に、例えば、井筒俊彦先生なんかは、ユングの深層心理学を用いて説明されたり、ユング自身も言及している仏教の阿頼耶識あらやしきを使ったりしておられます。おそらく、そこは相当バラレる関係にあるのだろうと思っています。でも、ここでは、一応、「心理学的」とは言わずに「靈魂論的」と伝統的な用語で言っておきます。

「神秘体験に基づいた理論」

一方で、クシャイリーは、このファナーの体験について、こういうふうに書いています。（神秘主義だから皆、修行をして、実際にそういう体験をするわけで、彼も文字を

読んで「そうなのか」と思っているのではなく、自分の体験に基づいて書いています。）

すなわち、「彼（修行者）が行為、道徳、霊的状态から消滅する時、このすべては彼にとつて存在しない。それは自分自身から、またあらゆる被造物から消滅した、とも言えるかもしれないが、（実際には）彼自身も被造物も存在し続けているのである」。

つまり、悪い行為や悪い心の状態から消えたときに、それらはすべて存在しないものだと感じられる。それは、自分自身からも、また周りのあらゆる被造物からも消えたのだと、修行者は感じるかもしれない。けれども、彼自身も、周りの消えたように感じているものも、すべて実際には存在し続けているのだ、ということです。一時的にそういう感覚に陥る、あるいはそういう体験を得るのであって、存在自体が変わっているわけではないということを、わざわざ述べています。「修行の過程でそういう神秘体験が得られるけれども、それは存在そのもののあり方とは違うのだ。そういう話をしているわけではないよ」ということを、彼は念押

しするわけです。

「倫理／靈魂論」と「神秘体験」

このように、古典期におけるファナーの特徴は2項目にまとめられます。ひとつは、倫理的な意味での心の状態に、また心理的・靈魂論的な意味での心の状態に焦点を絞るということで、言ってみれば「倫理的／靈魂論的理論」だということです。もうひとつは、「体験」というものが非常に重要視されているということ、これは「神秘体験に基づいた理論」と言えます。

3 中世におけるファナー説の哲学化――

イブン・アラビーを事例に

3・1 スーフィズムの哲学化

これに引き続き、12世紀の後半ぐらいから「スーフィズムの哲学化」の時代がやってきます。代表的な人物がふたりいて、ひとりにはシャイフルイシュラク・スフラワルディー (Shaykh al-Ishraq al-Suhrawardi 587／1191年没) という人です。「スフラワルディー」と聞くと、イスラームを御存じの方は「スフラワルディー教団」

というスーフィー教団を思い出すかもしれません。この教団の創始者もその甥も、名前はスフラワルディーですが、どちらもシャイフルイシュラク・スフラワルディーとは別人です。同じスフラワルド村で生まれたので、皆、スフラワルディーと呼ばれたわけです。「シャイフルイシュラク」の方は「照明哲学の師」を意味します。

その尊称のとおり、シャイフルイシュラク・スフラワルディーは「世界のすべては光でできている」という照明哲学なるものを唱えたことで知られています。スフラワルド村というのはイランにあるので、ゾロアスター教との関連を考える研究者もおります。

照明哲学で説くのは、純然たる輝き、全き輝きである「太陽」です。その純粹な光そのものの、「光の中の光」みたいなものが純粹善であって、そこからずっと遠い西の世界は闇の世界。純粹善の世界は東方にある。太陽が昇る瞬間の力強い太陽の光です。ああいうものがまずあって、これが純粹善・純粹美たる真理である。それが、だんだん力をなくしていつて、西に落ちて行

くときには闇に葬られてしまう。我々がいま生きているのは、この西の闇の世界である。肉体の牢獄の中に我々は閉じ込められ、光の全くない闇の世界に生きている。ここから脱して、光の世界を目指さなければいけない、というのが彼の説です。

彼の説はもちろん真理への直観に基づいた神秘主義ですが、アリストテレス哲学を非常に深く学んだ人なので、自分の説をすごく哲学的に書きます。哲学史的に言えば、アリストテレスの哲学そのものはもちろんイスラーム世界に入っていて、イブン・ルシュド（ラテン名：アヴェロエス）とか、イブン・スィーナー（ラテン名：アヴィセンナ）とかを生み出していくわけです。イブン・ルシュドは、新プラトン主義的な理解のほとんど入っていない、相当に正統的なアリストテレス理解なのですが、彼の流れはイスラーム世界でほとんど残らず、むしろラテン語訳によってヨーロッパの世界に入っていきます。一方、アリストテレス哲学が地中海のさらに東のほうのイランあたりに入っていくと、この照明哲学になる。これはイブン・ルシュドの傾

向とは正反対で、非常に神秘的なものになっていききました。

ですから、このスフラワルディーの思想は神秘主義としても面白いですが、哲学としても、いわゆるペリパトス学派（逍遙学派）的なアリストテレス哲学の発展の仕方とは全然違う形態の発展をしたものとしてよく知られています。ただ、十分な研究はまだ進んでいません。

3・2 イブン・アラビーのファナー説

「スーフィズムの哲学化」を進めたもうひとりとは、イブン・アラビー（Ibn Arabi 638／1240年没）です。私が専門として研究している神秘哲学者で、12／13世紀に生きた人ですが、彼の思想は「存在一性論」と呼ばれています。「存在一元論」と言っても構わないのですが、有名な井筒俊彦先生が日本では「存在一性論」で広められたので、この名前で通っています。世界は、ただひとつの存在（wujūd）の顕現によって成り立っているという説です。

ファナーの7段階

イブン・アラビーが、修行の過程で出てくるファナーについてどう述べているかですが、これまでの説とだいぶ様変わりしてきます。彼はファナーを7段階に分けて述べます。列挙しますと、①罪からの消滅、②すべての行為からの消滅、③属性と性質からの消滅、④自分自身の本質(自己)からの消滅、⑤全世界からの消滅(世界の現象的側面を考察することの停止)、⑥「神以外」のすべてのもの——「消滅」という行為そのものからすら——の消滅、⑦神のすべての属性とそれらの「関係」からの消滅、となります。

最初の段階は、これまで述べたのとよく似て見えます。「罪からのファナー」ですね。この①とその後の②③④は「人間レベルの消滅」を述べていると思います。その後、自分の周りの世界のことを述べて、そこが消滅する、あるいはそこから消滅すると言っている。「世界レベルの消滅」が⑤と⑥です。最後の⑦は「神の次元における消滅」で、大きく分けるとこの3段階です。

このうち、①の「罪からの消滅」と、最後の⑦「神

の段階における消滅」、このふたつに注目して論じてみたいと思います。

「すべての行為は正しい」

まず、「罪からの消滅」という言葉ですが、これは先ほどのクシャイリーの最初の段階「自分の悪しきエゴを消滅させる」ということとすごくよく似て見えますが、言っている内容は全然違います。

イブン・アラビーは、「この状態で、神秘家は『すべての行為は正しい』と認識する。なぜなら、すべての行為は神のものであるからだ」と言っています。つまり、罪なんてものもそもそも存在しないというのです。罪、悪というものがあると思うこと自体が一般人の迷妄であって、そこをまず抜け出すところから始まらなければいけない、というのがこの偉大な神秘家の考えです。

ですから、ここではつきり見られるのは、倫理の否定です。彼は、いわゆる善悪、倫理というものを最初から相手にしていません。そこを超えたレベルから、話を始めようとしています。

非人格的真理と人格神を区別

最後の到達点⑦ですが、「神のすべての属性とそれらの『関係』からの消滅」と言っています。ここで彼が追加的に説明しているのは、この段階においては、「神秘家は世界を、現れている真理 (Haqq zahir) と見なす」



「存在一性論」を象徴する泉（サルサビール）。各水盤から流れ落ちる水が、ひとつの水盤に集まっていく。一から多が生まれ、また一に戻っていくことを象徴している（トルコ・コンヤのメヴラーナー博物館）

ということです。「真理」は Haqq。H を大文字にしてあるように、要するに神のことです。ただし、イブン・アラビーの場合は、アッラーとは呼べない絶対者というものをその上に措定します。アッラーという名前で呼んだと勝手に何らかの限定を受けてしまうと考えるので、そのアッラーとすら呼べない何か、それを「真理」「ハック」という言葉で呼びます。

スーフィズムの話で、「我は神なり」と言った人がいると聞かれたことがあるかもしれませんが、彼ハッラージュ (Husayn al-Hallaj) は、言葉としては、「我は神なり」ではなく「我は真理なり」と言ったのです。この Haqq という言葉を使って「アナ・ル・ハック (ana al-Haqq)」——「我は真理なり」と言っています。彼の時代は10世紀で、まだスーフィズムが哲学化する前なので、ハックⅡ真理とアッラーを区別して、非人格的絶対者と人格的絶対者みたいに使い分けたのではなくて、おそらく「私は神だ」という確信を端的に述べたのだと思います。

ところが、イブン・アラビーまで来ると人格神と非

人格神の区別をしてるので、人格化される前、そういうふうに限定を受ける前の全き全体である何かを考えて、それを「真理」と呼びます。その、絶対無限定である「真理」がこの世に現れてきている、自己顕現してきている、それが世界なのだ、と見なす。「世界を、現れている真理と見なす」ということです。つまり、われわれが世界として見ているものすべてが神とひとつなのだと思えることができる。世界から隔絶されたどこかに神があるというのではなくて、世界はすべて神からつながって出てくると考えることができる。

ファナーを存在論的に理解

いままで申し上げた説明は、イブン・アラビーの名著『マッカ啓示』の中にありますが、次の引用はもうひとつの主著『叡智の台座』の中にあります。ここでは、同じ「消滅」という言葉を使って、「ある形の消滅とは、別の形での神の自己顕現 (self-manifestation) の瞬間における消滅のことである」と書いています。

ところで、彼は謎めいた表現がすごく多く、論理的に表現してくれないので、読むのがとても大変です。

日本語で読んでもわかりにくく、アラビア語で読むともっとわかりません。そのため、何千という注釈書が書かれています。注釈書の中には、すごくわかりやすい説明してくれているものもあります。「それはをくする」という文章があるとすると、「ここである『それ』とは○○のことである」といった説明をしてくれますので便利なのですが、ただ表面的に語彙を説明することと、その言葉を通してイブン・アラビーが何を言おうとしていたかを理解することとは、だいぶ乖離している場合があります。先ほど、アラビーは「真理」と「アッラー」を使い分けると言いました。非人格的な絶対者と人格的な神を使い分けます。ところが実際には、ある個所にそういう趣旨で書いてあったとしても、その後を読んでもいくと、明らかに非人格的な絶対者を指すべきところに「アッラー」を使ってみたり、ここは明らかに人格神の話をしているなど思うのに「ハック」と書いてあったり、結構、自由奔放です。ですから、混乱させられることも多く、彼の文章を読むのは、他の神秘家と比べて格段に骨の折れる作業です。

さて、もう一度先ほどのイブン・アラビーの言葉に戻りますが、ここで着目していただきたいのは、「自己顕現」という言葉が入っているということです。普通

は、自分のエゴが消滅して代わりに神的な臨在を得ると説明される神秘体験ですが、彼はそういう境地を説くのに、「自己顕現 (ajza'in)」という言葉を使う。この「タジャッリー」は、言葉自体はもともと古くからありますが、イブン・アラビーが非常に大きな意味の転換をさせて、「存在の顕現」という意味に特化したものです。絶対一者が、ちょうどネオプラトニズムの「流出論」のようにして「自己顕現」してくる、現れてくる。それによって世界が成り立っているのだという彼の「存在一性論」の根幹にあるのが、この「タジャッリー」という概念です。

すなわち、彼にとつて、この「消滅」「ファナー」というものは単に修行の過程における一過性の体験のことではなくて、この世界の根幹に関わる問題であり、一なるものからこの世界がどのように出てきたのかということと直結した問題として理解されるべきもの

だったと言えます。そこで、これを「存在論的ファナー理解」というふうと呼ぶことにします。

「倫理の否定」と「存在論」

先ほど挙げた「古典期におけるファナー論の特徴」に照らして、イブン・アラビーの説をまとめてみますと、まず倫理的側面では、彼は倫理を最初から否定してしまつて、善悪の彼岸に行こうとしている。「倫理の否定」です。ふたつ目の神秘体験の側面では、イブン・アラビーは体験にとどまらず、「存在論」を目指しているということが言えます。

4 中世における哲学的ファナー説への

挑戦——イブン・タイミーヤを事例に

4・1 いわゆるスーフイズム批判

このような「過度の哲学化」に対して、スーフイズム批判が起こってきます。3人だけ挙げておきますと、まず有名なのは、イブン・タイミーヤ (Ibn Taymiyya 728/1328年没)。マムルーク朝の人で、ちょうどモンゴルが攻めて来たときです。モンゴル来襲によって、

イスラーム世界が危うくなったときに、「モンゴルに対して立ち上がって戦うのは、正しいジハードだ」と言って皆を鼓舞した人です。

ただ、いまの「イスラム原理主義者」たちがイブン・タイミーヤをすぐ持ち上げるので、彼は思想史の主流にいたかのように誤解されていますが、実際はスンナ派の4つの法学派のうち一番小さいハンバル学派に属していて、しかもハンバル学派の中でも彼の考えはそんなに主流ではありません。かなり過激な思想なので、どちらかというと少数派であり、当時は相当マイナーなところにいたのではないかと思います。

少なくとも、イブン・タイミーヤの本が先を争って読まれるようになるのは近代以降です。近代になってから、彼は非常な再評価を受けていて、いまの原理主義組織の人間で彼の名前を知らない人はいないでしょう。よく引用もされています。ただし、そのイメージにはかなり後代に作られた面があると思います。

ふたり目は、それほど有名ではないかもしれませんが、ビルギヴィー (Bilgivi)。この人は、トルコのオスマ

ン帝国の16世紀の思想家です。

3人目が、ムハンマド・イブン・アブドウルワッハブ (Muhammad b. 'Abd al-Wahhab)。彼はワッハブ派と言われる宗派の創始者です。18世紀の人です。いまのサウジアラビアが建国されたときの理念がこのワッハブ派であり、この国の公的なイスラーム理解の根幹になっています。御存じかと思いますが、サウジアラビアはいまでも厳しいイスラーム法に則った政策をとっていて、女性隔離でも有名です。たとえば、サウジが女性差別的で非民主的だというときに欧米社会が非難するのは、女性には運転免許証を取る権利がないとか、自由に車に乗って買い物に行ったりしないようにしているということのようです。確かに、湾岸諸国の多くは女性を買い物に出しません。ただし、その代わりに、買い物は旦那さんがしてくれれます。奥さんにしてみれば、ただで使用人を雇っているようなもので、紙に書いて渡しておけば全部やってくれるので、悪い面ばかりではないという人もいます。いろんな意見がありますが、まあこれは議論の本筋とは関係ありません。

4・2 イブン・タイミーヤのファナー説

きょうは、3人の中で最初のイブン・タイミーヤに焦点を合わせたいのですが、実は私自身は「イブン・タイミーヤがスーフイズムを批判した」ということに關しては留保をつけています。スーフイズムの一部を批判したことは確かに間違いない事実ですが、全否定はしていません。考えています。実際、彼はわざわざファナーについて書いていますが、ファナー説は明らかにスーフイズムだけが論じるものなのです。

彼は「3段階のファナー説」を論じます。3段階という点では、古典期のクシャイリーと一緒です。また、イブン・アラビーも大きく言えば3段階です。イブン・タイミーヤの所論では、まず①「存在 (wujud) からの消滅」。存在が自分の意識の中から消えてしまう。次に②「目撃 (shuhūd) からの消滅」。神以外のものを目撃しなくなる。これは多くのスーフイーの神秘体験を意識しています。最後に③「崇拜 (ibādah) からの消滅」。アッラー以外のものを崇拜しなくなるという状態です。

①「存在論的なファナー理解」の否定

最初の「存在からの消滅」ですが、これは「神以外にこの世には何も存在しない」ということです。つまり、存在論的には神のみが存在する。これは明らかに「存在一性論」です。神だけが、つまり「一なるもの」だけが存在していて、その自己顕現として現れているのが世界だと考える。こういう考えを、イブン・タイミーヤは、ばつさりと斬り捨てます。「これは、道を踏み誤った(存在)一性論者たちの(唱える)消滅説である」と。完全に間違いだとはっきり言っています。もちろん、イブン・アラビーとその信奉者たちに対する痛烈な批判です。彼は、イブン・アラビーとその信奉者に対して批判する論考を幾つも書いていて、「存在一性論」に關して正面切つてきつちりと論じています。それも、彼らの書いたものを相当きちんと読み込んで批判しています。後代のワッハーブ派となると、彼ほど勉強しなくなるのですが、イブン・タイミーヤは、よく勉強してわかつたうえで、「そういう立場を取らない」と批判します。いずれにしても、ここでは「存在論的なファ

ナー理解」というものが否定されています。

②多くのスーフィーの体験を「否定はせず」「評価もせず」

次に②の「目撃からの消滅」です。つまり、神のみを目撃するという体験であり、「神以外の者を目撃することの否定」です。体験として神だけがいて、自分が消えるという段階です。これに関しては、彼の態度は、イエス・アンド・ノーです。

「これは、アブー・ヤズィード（・バスターミー）について伝えられているように、多くのスーフィーに起こったものである」と書いています。アブー・ヤズィード（・バスターミー）というのは非常に有名な古い時代のスーフィーですが、彼について伝えられているように、多くのスーフィーに起こった体験であると。

彼がスーフィーそのものを全否定していると考えれば、この「スーフィー」という言葉も悪い意味に取られるかもしれませんが、そうではなくて、単に「これは実際、多くのスーフィーに、よく起こったことだ」と言っているだけです。修行者による一時的体験であ

り、酔いと同じで罪に問われることはないとも言っています。

③イスラーム法に則った「正しいファナー」

3番目が、「崇拜からの消滅」。神以外のものを崇拜することの否定です。これは、イスラームの根幹である信仰告白の最初の部分と同じです。「アッラー以外に神はないと告白します」という言葉ですね。この段階の消滅をイブン・タイミーヤは、「これは、預言者と彼らに従う者たちの状態(ḥāl)である。・・・これこそ、宗教的(=イスラーム的)で適法な消滅(fana' 'ahī sharī)である」と言います。これこそが、イスラーム教徒の正しい状態であつて、シャリーア(イスラーム法)に則ったファナーというものだというわけです。

ですから、彼は「ファナー」という言葉を完全に換骨奪胎してしまったわけで、まったく神秘主義説ではなくなっています。いわゆる普通のイスラーム法学・神学的な意味での「神の唯一性」すなわち「タウヒード(tawhīd)」の概念です。これを、彼はわざわざ「ファナー」という言葉を用いて説明するわけです。「預言者

と彼に従う者たち」ですから、この説を唱える者が真

の信仰者である。つまり、イブン・タイミーヤにとつては、「正しいスーフイーとは、正しいイスラーム教徒である」という構図ができればいいわけです。

まとめますと、①逸脱した存在一性論による存在論的消滅、②多くの修行者による一時的体験としての消滅、③イスラーム法に沿った正しい消滅、という分類です。

「3種のスーフイー」と「スーフイーに非ざる者」

話が少しずれますが、そもそもスーフイーというものをイブン・タイミーヤはどう見ていたのかといえますと、彼は「3種のスーフイー」ということを言います。

まずは、①「真のスーフイー (ṣaḥīḥa al-ḥaqīq)」。これは「真の信仰者」のことであり、さっきの3番目の説のように、タウヒードを信じ、「アッラー以外に神はない」と唱える人たちです。これが「真のスーフイー」です。

次は②「日々の糧の(ための) スーフイー (ṣaḥīḥa al-azāq)」です。そして、③は「形ばかりのスーフイー

(ṣaḥīḥa al-raṣm)」です。

②と③は前の「3段階の消滅」とは対応しませんが、「日々の糧を得るためのスーフイー」というのは、おそらくタリーカ(スーフイー教団)に属していた人たちのことを言っているのだと思います。そういうところに属していると、ご飯を食べることができるので、まあ日本で言うと、寺に入っていれば衣食住を与えられる。そういうところに行って修行していた人たちです。さらに「形だけのスーフイー」という存在が挙げられています。かろうじてスーフイーと呼べる程度の人たちです。

そして、イブン・タイミーヤは、ある人たちを指して「彼らをスーフイーとは認めない」と言っています。彼がスーフイーの話をする前後に、異端と二元論の徒というのが出てくるのですが、彼は「異端と二元論の徒 (aḥl al-bida' wa al-zandaqa)」はスーフイーには含まない」と、はっきり言っています。具体的には、先ほどお話ししたイブン・タイミーヤがファナー説の最初で難難する分類、つまりイブン・アラビーをはじめとする「存

在「一性論」を唱える人々です。「存在はただで、そこから多の世界が出てくる」という哲学的な神秘主義説を唱えるやつらはイスラーム教徒ではなくて異端であり、一元論であるべきイスラームから逸脱した二元論の徒だ」というのが彼の判断です。ですから、「イブン・アラビーをはじめとする存在論的な神秘主義を唱える連中を、スーフィーと呼んではいけない」と言います。逆に言えば、スーフィー自体を評価しているわけです。「スーフィーは評価できるけれども、イブン・アラビーをそもそもスーフィーに入れるな、あいつはスーフィーではないのだから」というのがイブン・タイミーヤの批判の仕方です。

「倫理への集中」と「神秘主義哲学の否定」

イブン・タイミーヤのファナー説の特徴をまとめると、まず「倫理への集中」という点です。ファナーというのは普通だと「エゴの消滅」を説き、善悪を相対化していくような感じですが、イブン・タイミーヤは基本的に倫理の話ばかりをしています。シャリーア（イスラーム法）を持ち出して、それに適法であるというこ

とを重視します。それは、倫理的に善悪をはっきりさせるということで、こうした倫理への集中が特徴です。それから、神秘主義、特に神秘主義哲学に関しては激しく否定しています。これが、ふたつ目の特徴と言えます。

5 スーフィズムの変遷を検証する

さて、最初に挙げました「発表の目的」に戻りますと、ひとつは「スーフィズムにおけるファナー説の変遷を検証する」。ふたつ目が、「スーフィズムを再検証する」ということでした。まず、このふたつ目のほうから申し上げます。

体験的神秘主義・哲学的神秘主義・倫理

まずは、古典期の最初に見ていただいたのは、神秘主義というものを認めるけれども、それを何より体験として認める。「体験的神秘主義としてのスーフィズム」です。

それからイブン・アラビーになると、それを哲学体

	倫 理	靈魂論 (神秘体験)	存在論 (神秘哲学)
1. 古典期のスーフィー	○ → ◎		×
2. イブン・アラビー	×	○ → ◎	
3. イブン・タイミーヤ	◎	△	×

表 スーフィズムの諸相

系として、存在論として確立しようとする。そういう「哲学的神秘主義としてのスーフィズム」もある。

それから、全く神秘主義ではなくて倫理・道徳というレベルでスーフィズムを理解しようとしている人もいる。「倫理としてのスーフィズム」と言えます。

この人たちは、いずれもスーフィーという言葉、あるいはファナーというスーフィズムのカギ概念を用いて、それぞれの説明をしているわけです。図式化しますと表のようになります。

では、目的のひとつ目の「ファナー説の変遷の検証」

はどうでしょうか。

古典期のスーフィーは倫理から始まり、靈魂論——神秘体験ですね、体験に基づく「消滅」というところに話をもっていくきます。存在論的なものは一切論じません。「そういうふうに一瞬感じることもあるかもしれないけれども、実際には存在自体が変わっているわけではない」と、わざわざ断り書きをしている。

イブン・アラビーになると、倫理を最初から超えようとしています。そこから始まって、靈的体験、神秘体験を経て、しかし、それは単に一時的な体験として起こっているだけではなくて、世界そのものがそもそもそういうふうにできているのだ、と主張する。これがイブン・アラビーの広大な宇宙論です。

正反対になるのが、イブン・タイミーヤで、彼にとつては倫理こそが大事であり、存在一性論はとんでもない妄論ということになります。靈魂論が微妙なラインで、先ほど見ましたように、神秘体験的なものはアブー・ヤズィード・バスターミーなんかによく起こるという程度の評価ですから、○なのかもしれないし、

×なのかもしれないし、ちょっとわかりにくいです。ここで言われている「多くのスーフィーに起こる」だけだったら、わりと好意的だとも考えられますが、例として挙げられているバスターミーという人物は、例の「我は神なり」と唱えたハッラージュの少し先輩で、「我に讃えあれ」と言った人です。普通は「アッラーに讃えあれ」と言いますが、「アッラー」のところに「私」に替えて「私に讃えあれ」と言ったわけです。要するに、「私は神だ」「私はアッラーだ」と言ったのと同じなので、ちょっと異端視される可能性の高いスーフィーです。

そういう人物をわざわざ代表例として挙げて、なおかつ「多くのスーフィーに起こる」と言っているのか、彼がどのへんを実際には考えているのか、限りなく×に近いほうでこの話をしようとしているのか、多くのスーフィーに起こるのだから許容される範囲だと言おうとしているのか、あの一文では読みかねるところがあります。微妙なところです。

6 スーフィズムの3極構造

6・1 民間信仰としての聖者崇拜

ここまでで一応、本論は終わりますが、少しだけ、おまけが付いています。

実はいま挙げたイブン・アラビーと、イブン・タイミーヤが、どちらも聖者になってしまっているという話です。

両者のお墓はシリアのダマスクスにあります。イブン・アラビーの墓は、モスクになっていて、彼の墓廟はガラス張りの箱みたいなものに囲まれています。私も、何度もお参りに行っていますが、内戦のため、行けなくなりました。

これに対して、イブン・タイミーヤのほうは、本人が聖者信仰を激しく批判していましたので、死後に自分が崇拜されるのはさぞかし不本意だろうと思います。彼がスーフィズム批判をした際、ターゲットはふたつありました。ひとつは神秘主義哲学で、イブン・アラビー学派を激しくたたきます。返す刀で彼が斬ってい

たのは、「無知蒙昧な連中」が聖者信仰に伴って行っているばかげた慣行です。例えば、お墓に行って自分の頬つべたをすりつけるとか、何か供物をあげて御下がりをもたらって来るとか、こうした慣習は世界中であると思うのですが、「こういうことは一神教に反する」というのがイブン・タイミーヤの説です。

確かに、ああいう行為はアッラー以外の何かに不思議な力がある、功德があると思って、お願ひに行っていると考えることが可能なわけです。そういう意味では、イブン・タイミーヤは、すごくシャープに一神論を突き詰めている感じですね。だから、そのときに聖者信仰を激しく彼はたたくわけです。聖者廟参詣の行為そのものを厳しく非難して、彼自身もちろん聖者廟参詣は一切しなかった。ところが皮肉なことに、彼の死後、お墓はすごい参詣場所になり、人々が群れをなすという状態になってしまいました。

もともと、彼はスーフィーの大きな共同墓地に埋められました。彼の弟はスーフィーで、記録によるとその隣に埋められていたらしいです。ただ、その後、戦



イブン・アラビー廟の内陣。緑色のガラスケースに、アラビーの棺が入っている。
廟は、ダマスカスの街を一望するカシオン山の中腹にある

間期にフランス軍が占領して、墓を全部壊して病院を建てた際に、イブン・タイミーヤの墓だけが残されたそうです。鉄格子で囲まれ、人々もあまり近づかなく

て、明らかに参詣の対象ではありません。

イブン・アラビーは多分、聖者として尊崇されてよかったと思っているでしょう。他方、イブン・タイミーヤは苦々しいと思っています。ともかく、こういう正反対の両者が、ふたりとも聖者として尊崇されてしまうという事態になり、スーフィズムの「民間信仰」としての側面が一部ここに現れていると思います。

6・2 「神秘主義だけではない」

スーフィズムの多様性

冒頭に「3極構造」をお見せしました。「スーフィズムとは何なのか」という場合、従来は「イスラーム神秘主義だ」と定義してきましたが、それでは不十分だということとを言うために、あえて定義をしないで、分析の枠組で示しました。それぞれの軸に変数を取って説明をしてみます。

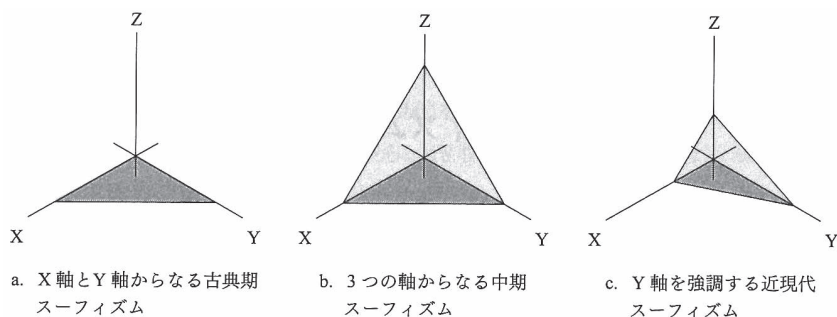


図2 3極構造による各時代スーフィズムの図式化

(東長靖『イスラームとスーフィズム』名古屋大学出版会、47頁から転載)

例えば、イブン・アラビーだと、神秘主義(X軸)がビュートと伸びていくわけです。さっき申しましたように道徳の側面はないので、道徳のところのY軸をゼロにする。彼自身がごくエリートで、民間信仰のところもおそらくほとんどなかった。多分、イブン・アラビーのスーフィズムはX軸だけが伸びた形になります。他方、イブン・タイミーヤのスーフィズムは、ひたすら道徳的で神秘主義を一切否定している。民間信仰も完全に否定しているので、彼のスーフィズムはY軸だけになる。

多くは、こんなに極端ではなくて、例えば古典期だ

と、道徳から始まって神秘主義まで発展しますが、民衆がまだ入って来ていなくて、エリートなので、多分、X軸とY軸だけで、下にべったりくっついた形になります。それから、中世になると、民間信仰が非常に激しく強くなってきて、同時に神秘主義哲学も発展し、道徳的なものも非常に強く出ているので、ほぼきれいな三角錐みたいなものができるだろうと思います。また近現代になると道徳のY軸が伸びていきます(図2を参照)。

一応、この3要素を考えれば、いろいろな時空間のスーフィズムというものを示すことができるかなと考えて作っているのがこの3極構造論です。

質疑応答

【質問者A】クシャイリーの場合でも、イブン・アラビーの場合でも、「自分自身からの消滅」というのが語られます。そうすると、自分自身が消滅した後、消滅を遂行する主体は一体どう考えられているのかをお聞きし

ます。

【講師】おっしゃるとおり、ここは問題だと思っています。ただ、スーフィズムにおいて、あまりそういう議論はされていないと思います。ひとつの考え方として、例えば、自分の中にガスが充填されているとします。そうすると、自分が消滅すると、その分だけ、ガスが出て行く。すると、その部分は気圧が減るので、外から神のガスが入って来ると考えます。それで、一定の圧が保たれている。だから、少しずつ進化して、神の要素が多く入っている私となって、その先へと進んでいるのだと思います。

【質問者A】では、神自身が消滅を遂行するわけですか。

【講師】神そのものではありません。ただ、スーフィズムでは人と神との間が厳格な一神教ほど遠くないので、その間をグラデーションでつないでいくような考え方をします。

一応そうお答えさせていただいて、今後の課題とさせていただきます。

【質問者B】イブン・アラビーのファナー説の最初の「罪からの消滅」というところで、「この状態で、神秘家は『すべての行為は正しい』と認識する。なぜなら、

すべての行為は神のものであるからだ」とあります。これは「すべての行為はアッラーに帰す」というテーゼがあつて言うのだと思いますが、「すべての行為」というのはどこまで含んでいるのでしょうか。例えば、現代の認識論では、考えることや信じることを「行為」に入れるか入れないかという問題があります。イブン・アラビーの場合、「行為」には「認識する」ようなことも入るのか。入るとすると、そもそもこういうことをやっていること自体も「神のもの」ということになるのだろうかという質問です。

【講師】ありがとうございます。ここでの「行為」には、意識は入っていないと思います。先ほど紹介したイブン・アラビーの「7段階のファナー説」では、①が「罪からの消滅」で、②が「すべての行為から」、③が「属性と性質から」、④が「自分自身の本質から」という段階が書いてあります。明らかに外的なものから内的な

ものへ、人間の本质に向かって順に消滅していくという構造になっているわけです。

神についてもそうですし、人間についてもパラレルに議論しますが、まず存在の「本質」があつて、人間の場合は諸名があり、神の場合は神名があります。それから「属性と性質」があり、その下に初めて「行為」があると考えます。ですから、意識のレベルは属性のレベルに入っているのだと思います。

実際、行為というのは別の言い方で「跡^{あと}」と言います。つまり、何かしていることそのものというよりは、何かをしたことよって生まれるものという含みです。例えば、神の行為というのは、神が何かを創ることとも言えますが、実際には神が創り出したもののことを「神の跡」と言います。ですから、行為それ自体は意識のレベルからは外れていると思います。

【質問者C】私も、イブン・アラビーの「罪からの消滅」についての質問です。

イスラーム教徒にとっての「六信五行（六つの信条と

五つの義務」の中の六信に、「カダル」つまり「定命（運命は神によって定められていること）を信じなければならぬ」という教えがあったと思います。そのことと、イブン・アラビーが「すべての行為は正しい……すべての行為は神のものであるから」と述べていることが、つながっているのかなと思いましたが、それに付いて。

【講師】これは結構、大問題になります。カダルというのは「すべては神の定められた予定だ、神の摂理だ」という説で、イスラームではこれが主流説です。その意味では、「すべての行為は正しい」という「行為」を「神のなさる行為」と考えれば、これは当然のことです。ですから、アラビーのこの論の「すべての行為は」というのは「人間の行為」です。そして、それはほかならぬ「神の行為」だと彼はここでは同定しているわけです。神の行為が正しいということに異を唱える論者はひとりもいません。しかし、それを「人間の行為と同定している」という、そこには問題があるという神学的な批判はあり得るかもしれません。

【質問者D】預言者ムハンマドが体験したような神秘体験について、イブン・アラビーはどういうふうに見ているのでしょうか。キリスト教神秘主義の場合であれば、イエスの存在をどう見て、どう位置づけるのかということ自体が、重要な神学的論争になります。彼は、最高にして最後の預言者であるムハンマドの存在や体験をどう見ているのか。あまりにも恐れ多いから言及がないのか、言及しているとすれば、どういう存在としてなのか、教えていただければ幸いです。

【講師】イブン・アラビーは、ムハンマドに関して繰り返し言及しております。そのことによって、イスラーム神秘主義と言われているスーフィズムが、イスラームの中で傍流になったことはほとんどありません。スーフィズムが異端審問を受けたことも、ほとんどありません。常に主流を歩いています。

ムハンマドに関しては、もちろん理想的人間として描かれていて、スーフィズムでは「完全人間」という言葉を使いますが、理想的人間であり、人間のアイデアであり、プロトタイプです。

その場合によく引かれるのが、ムハンマドの言行録「ハディース」の中の言葉です。「アダムが土と水の中にいるときに、私はもう預言者だった」というのです。水と土をこねて、そこに神様が息を吹きかけて人間のアダムが生まれる以前、つまり、まだ人間が創られる前に、もうムハンマドが存在していて、なおかつ預言者だったということです。

これは、もちろん歴史的ムハンマドとは違うので、「ムハンマドの光（ヌール・ムハンマディー）」とか「ムハンマドの真実在（ハキーク・ムハンマディーヤ）」とか、別の言葉をわざわざ作り出して、理想形のムハンマドのことを語っています。仏教の三身説で言う法身のような存在と言えるかもしれません。

【質問者D】その理念的なムハンマドがモデルだとすると、修行者はそこに合一することが目指されていたということになりますか。

【講師】歴史的にそうなったこともありますが、合一の対象は、やはりムハンマドではなくて神でなければいけません。それが多数派の理解だと思います。ただし、

修行の段階として、まず自分の師に合一し、次いでムハンマドに合一したうえで、最後にアッラーへの合一がなし遂げられるという説があります。

【質問者E】先ほど、「いまのイスラム原理主義者にとつて、イブン・タイミーヤが大きな存在である」と教えていただきました。スンナ派の中でも決して主流ではないにもかかわらず、彼の本が非常に熱心に読まれていると。原理主義と言われている人たち——例えば問題になっている「IS」に対して、世界は彼らの主張をほとんど理解しないまま、武力だけで対応しようとしていると思います。彼らの思想とイブン・タイミーヤはどういう点で共通点があり、なぜ彼らが引き付けられるのか。このへんを教えていただきたいと思っています。

【講師】この分野は私の専門ではありませんが、一応努力してお答えさせていただきます。

共感されている最も強い点は、「イスラーム法を厳格に施行すべきだ」という主張だと思います。イブン・

タイミーヤが置かれていた時代は、それまでの強力な国家がモンゴルという外敵によって、もちろん崩壊していく時代でした。領土が蹂躪されていき、同時にこれまで「イスラーム法」で統治されていた秩序が全くズタズタにされていく時代です。

そこで彼が第一に訴えたのは、とにかく「イスラーム法」をしっかりと施行しなければならない、それに基づく国家を作らなければいけないという点でした。ISも、「イスラーム法に厳格に従うべきだ」という主張をしています。もともと、彼らなりの「イスラーム法」であり、多くのイスラーム教徒の考えているイスラーム法と同じではありません。

人気がある2番目の理由は、イブン・タイミーヤが学者でありながら自ら法的意見（ファトワー）を出して、皆で剣を取ってモンゴル軍に立ち向かおうと呼びかけ、実際に自ら戦闘に出て行ったという、その行動力です。武力をもって相手を撃退するという気迫が、共感を呼んでいるのだと思います。

ただ、いわゆる原理主義の勢力には、これまでター

リバーンがあり、アルカーイダがあり、ISがありと続いています。イブン・タイミーヤらの古典の思想については、どうも原理主義者たちのリテラシーがどんどん下がっているような気がします。最近になるほど、あまりきちんと勉強しなくなっているのではないかという印象をもっています。

（とうなが やすし／京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科教授）